

踏 み 跡 < My mountains >

丹沢	四十八瀬川右股(勘七の沢) 遊行	No.078
----	------------------	--------

昭和42年1月22日

メンバーが多いことでは、38年3月に卒業記念に奥多摩へ行った時と同じ「総勢七名」とタイ記録。

石関、泉田、鶴飼、加藤、小林、佐藤、吉野。

小檜山へ行った時に使った12ミリのナイロンザイルを持って、多少の練習を兼ねた親睦の沢登り。

朝の電車で渋沢へ、大倉へ。大倉からおなじみのルートを辿って四十八瀬川へ。この沢は二度目の体験。

さすがに冬、大きな滝はほとんど水流の両側に氷を付けており、かなりダイナミックなスケールになっている。

F2では、ルートが完全に氷に覆われており、トップの私がロックハンマーで割り落とししながら登ることになり、一番冷たい思いをさせられた。だが胸元を氷塊が滑り落ち、やがて滝つぼにジョボンと鈍い響きを聞かせてくれると、なんとなく心地よく感じる。

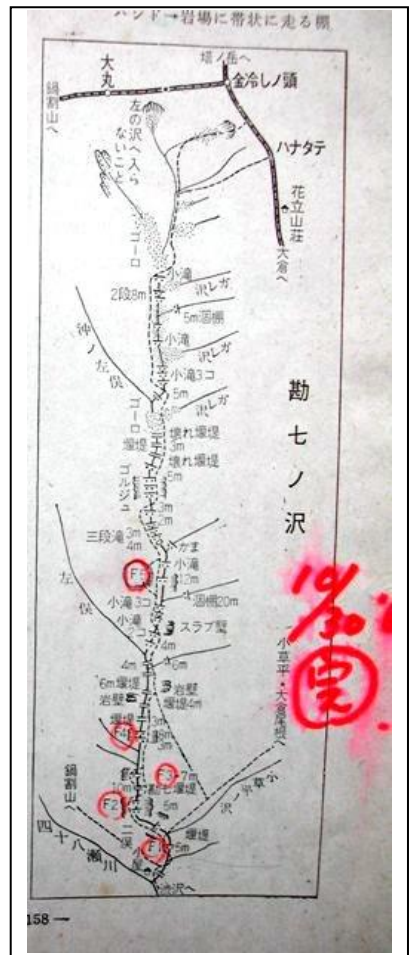
F4もかなり大きな氷瀑となっていたが、灰色に固まった氷の塊はとても割り落とせるような氷ではない。氷と左岸との間をへずって中段に出て難所を通過したが、左手の指をロックハンマーで殴ってしまい血豆になってしまった。

トップは登攀が終わるとセコンド以下をジッヘルしなければならず、季節が季節だけに濡れたザイルは、「握る手の冷たさや待つ身の長さ」の心境である。

F5の直下で食事をして大休止。おまけに食事の後は相撲をとったり、年甲斐もなくリラックスした。

F5もアンザイルで登り、以降は特に問題もなく通過し、無事下山した。ザイルワークについては経験豊富な加藤を筆頭に、かじる程度の鶴飼・小林・吉野、無経験の泉田・石関・佐藤というメンバー構成で、加藤の充分なる手ほどきで皆実技を学ぶ有意義な一日となった。

おまけに、帰りに渋沢駅でカ比への腕立て伏せをしたり、若返り山行の一日でもあった。



以上

(修正・更新:2023年11月)

